デジタル庁 御中

令和6年度
スタディログの活用に関する調査研究
＜実証事業報告書 概要版＞

令和7年3月27日
エヌ・ティ・ティコミュニケーションズ株式会社

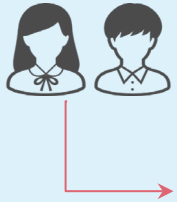
© NTT Communications Corporation All Rights Reserved.

1. 事業の全体像

令和６年スタディログ活用調査研究では、鹿児島市の小・中学校の協力を得て、
スタディログの活用ユースケースを創出し、データ利活用に向けた課題や示唆を得るための実証を行った。

実証計画

■複数のデジタルドリルを用意し、自己調整型の学びを実施



教科書

デジタルドリル
(Qubena)

デジタルドリル
(eboard)

■ダッシュボードによるスタディログの可視化

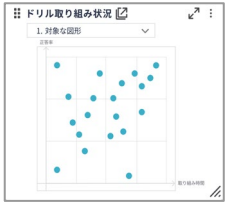
一人一人に適した指導・支援につながるデータの可視化

進捗・達成度確認

✓学習進度の把握
✓正答状況の把握
✓学習量の把握

学習の見通し

✓学習計画
✓学習振り返り



実証結果

■学習の多様化により児童生徒の主体的な学びを促進

複数のデジタルドリル ▶ 複数のデジタルドリルを設けた結果、単一ドリルを使う子と複数ドリルを使う子が見られ、多様な学習パターンが確認された

自己調整型の学び ▶ 自己調整型の学びを実践した結果、質問紙調査から、児童生徒が主体的な学びを進めたことが確認され、実証前後の比較によりその成長が明らかになった

■スタディログの利活用により個別最適な学びを支援

複数のデジタルドリルのスタディログ可視化（発見・把握・効果）

・学習の進捗・理解度の状況を把握し、声掛けが必要な児童生徒を発見できた
・教員にスタディログを還元することで、
　新たな気付きがあり、必要な指導・支援につながった
・児童生徒へのスタディログ還元は、自己調整型の学びに役立つ意見があった

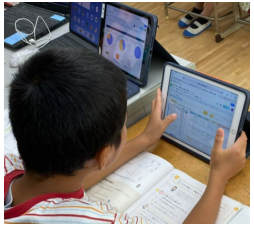
© NTT Communications Corporation All Rights Reserved.

2. スタディログ活用を前提とした授業実践

授業では複数のデジタルドリルを用意し、一目で学習の進捗や成果がわかるように学習計画から振り返りの活動を記録・管理した。その結果、児童生徒は自己選択・自己決定を行いながら学びの自己調整を実現できた。

児童生徒が利用した学習計画シート

予見	遂行	省察
約５分 ※単元全体の計画は１時間目に行う	約３０分	約１０分



今日の計画を入力する様子

デジタルドリルに取り組む児童

学習計画シート　比例と反比例　名前　サンプル太郎

学習目標　学習前 A　学習後

A ・関数、変域、比例、反比例について理解し、表や式、グラフを用いて比例や反比例を表すことができる。
・比例、反比例で表す２つの数量について、表や式、グラフなどを用いて調べ、変化や特徴を理解している。

B ・関数、変域、比例、反比例について理解している。
・比例、反比例で表す２つの数量について、表や式、グラフなどを用いて特徴を理解している。

未セット 16.7%　完了 16.7%　計画済 66.7%

単元を通したふり返り

他の人のシートを見る

学習計画表　*計画表の表示に時間がかかる場合があります

学習カード	授業回	完了
教科書P. 32	1	☑
教科書P. 33	1	☑
教科書P. 34	3	☐
デジタルドリル(Qubena)	1	☑
デジタルドリル(Qubena)	2	☐
デジタルドリル(eboard)	4	☐
デジタルドリル(eboard)	4	☑
	4	☑

授業	日付	学習前		経過	学習後		ふり返り/次回の見通し
1	10/1	見通し	ばっちり	順調	進んだ	S	
		スピード	ふつう		分かった	A	
		進め方	グループで		楽しかった	B	

デジタルドリル(Qubena)	2	
デジタルドリル(eboard)	4	

複数のデジタルドリルから自分で学習方法を選択

予見(学習計画)
自己調整型の学びを進める上での見通し情報

遂行(個別的な学び)
学習行動・学習状況の情報

省察(振り返り)
自己調整型の学びを進める上での評価情報

学習計画と遂行状況を一元的に管理することで、効果的な振り返りにつながり、次の学習目標を立てやすくなる

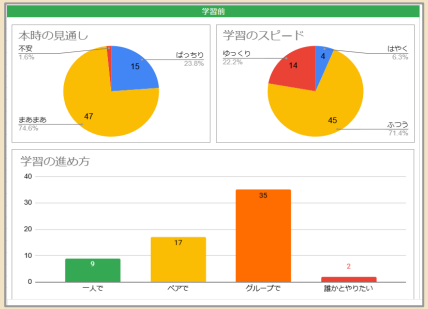
© NTT Communications Corporation All Rights Reserved.

3. スタディログの活用のユースケース

教員は３種類のダッシュボードを通じて児童生徒の学習計画のログやデジタルドリルの取組状況を確認し、指導・支援が必要な児童生徒を特定して適切な支援につなげることができた。

学習計画ダッシュボード

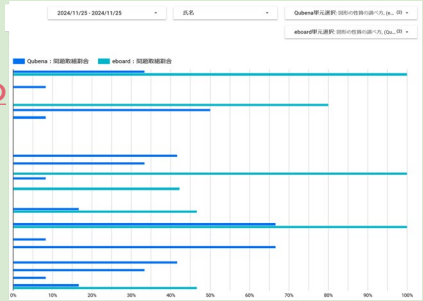
予見に関する記録を確認できる
（見通し・スピード・進め方）



ドリル取組ダッシュボード

遂行に関する状況を一元的に確認できる
（複数ドリルの取組量・正答率）

複数ドリルの学習状況



振り返りダッシュボード

省察に関する記録を確認できる
（学習の達成度・理解度・満足度、振り返り）

結果

学習進度を把握することで、
進度が遅い子への指導や
進度が早い子への新たな課題配布により、
学習の継続性を保つことができた。

普段の見取りと比較しできている/できていない子
の発見や正答率が低い子への個別指導など
個々の進度や学習スタイルを把握し、
より効果的な指導・支援が可能になった。

達成度・理解度・満足度の自己評価による
指導・支援が必要な子の発見や、
振り返り文章内容から
次の授業内容を検討・改善することにつながった。

授業中に児童生徒の学びの状況を確認することで、個に応じた指導・支援につながる

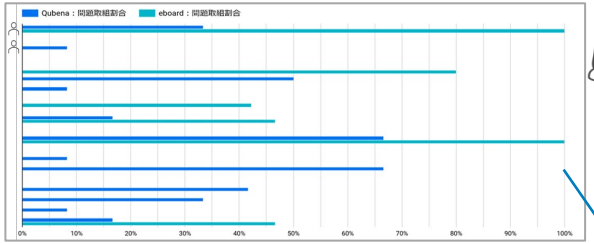
© NTT Communications Corporation All Rights Reserved.

4. 実証結果

複数のデジタルドリルを用意することで、それぞれの児童生徒に応じた学び、自己決定に基づく学びが実現できた。また、ドリルの進捗をダッシュボードで可視化し、教員や児童生徒にフィードバックすることで、個別最適な支援につながることも明らかになった。

■学習の多様化により児童生徒の主体的な学びを促進

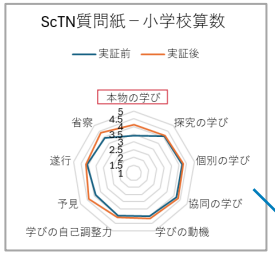
✓複数のデジタルドリルを設けた結果、単一ドリルを使う子と複数ドリルを使う子が見られ、多様な学習パターンが確認された



・複数の教材があることで学習しやすかった
・Qubenaには応用問題もあり、テスト対策にも役立つ
・eboardは問題の解決方法を動画で見れることが役立つ

ドリル取組ダッシュボードから、一人一人の学習状況が把握できた

✓自己調整型の学びを実践した結果、児童生徒が主体的な学びを進めたことが確認され、実証前後の比較によりその成長が明らかになった



ScTN質問紙の『本物の学び』のうち「自己決定に貫かれた学習」の項目が、実証全対象クラスで、実証後に伸びた

■スタディログの利活用により個別最適な学びを支援

✓学習の進捗・理解度の状況を把握し、声掛けが必要な児童生徒を発見できた

単元内自由進度学習の授業形態なので、生徒はワーク、Qubena、eboardなど様々なツールで学習している。生徒が何を使いどこを学習していたかを、１つの画面で把握しやすい。

✓教員にスタディログを還元することで、新たな気付きがあり、必要な指導・支援につながった

つまづいている子がデータでわかることで、質の高い声かけができるようになった。今までの一斉授業では上位や下位の子に声かけが集中していたが、中位層の子もよく頑張っていると感じた。

✓さらに、児童生徒へのスタディログ還元は、自己調整型の学びに役立つという意見があった

自分の学習の進め方を見返すことができる。

自分がいつどのように取り組んだのかを数値化してくれるので達成感がある。

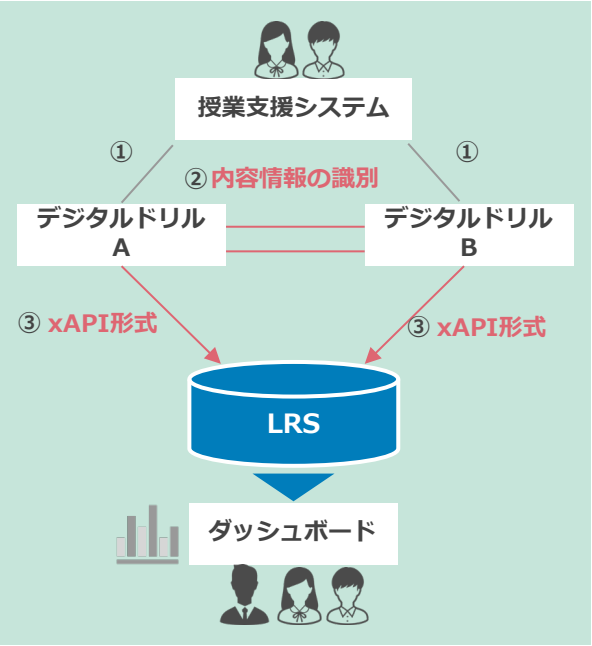
思った以上に取り組めていないことに気づき、次の単元での勉強方法を見直したいと思った。

スタディログの利活用により、児童生徒の能力や特性に応じた個別指導・支援が実現につながる

© NTT Communications Corporation All Rights Reserved.

5. スタディログの活用の課題・展望

スタディログの活用を促進するためには、複数のデジタルコンテンツによる学習を支援する環境の整備、個々の学習状況を把握するための内容情報の識別、各コンテンツごとのスタディログの流通をどのように整理していくかを検討する必要があることがわかった。



No	課題	展望
①	教員や児童生徒が複数のデジタルコンテンツから コンテンツを選んで学習を進めるためには、 デジタルコンテンツが連携された学習環境が必要。	Learning Tools Interoperability（LTI）の DeepLinkingに対応することで、 単元設定とコンテンツ呼び出しが可能になり、 児童生徒は授業支援システムから直接アクセスできる。
②	複数ドリルのスタディログを統合するためには、 教科書の単元に紐づくデジタルコンテンツにも、 単元メタデータに基づいてスタディログを蓄積することが望ましい。 しかし、標準化された内容情報が付与されていないために手作業が発生する。 また、学習指導要領にはコードが割り振られているが、 校種や教科ごとに構成や粒度が異なる。	学習指導要領コードと単元、 単元とデジタルコンテンツとの連携には、 大中小の単元名称をキーとすることで紐づけることができ、 単元ごとにスタディログの利活用ができる。 さらに、CASEを用いて単元に関連する学習指導要領や 単元目標を参照することで、 具体的にどのような内容が関連しているかを判別できる。
③	xAPIは複数のコンテンツ事業者のデータを用いた 分析手段として有効だが、 内部設計や保守運用のコストに対して メリットが見合わず、 実現が難しいことがわかった。	コンテンツ事業者による xAPI Statement形式データ提供用APIの提供、 標準仕様に準拠するための施策の整備、 そして各ベンダーが独自拡張を前提とした 小規模なxAPIプロファイルの段階的拡充が対策となりうる。

これらの取組により、複数のデジタルドリルからスタディログを統合的に活用する可能性が広がる

© NTT Communications Corporation All Rights Reserved.

令和6年度スタディログの活用に関する調査研究（鹿児島市）

鹿児島市の小学校（5年生）・中学校（1,2年生）で自己調整型の学びを実施

学習計画を立てる

単元ごとに学習のめあてを決めて、毎時ごとにめあてを達成するための計画を作成する

- 学習のスピード
- 学習の形態（だれと学ぶ）
- 学習方法（何で学ぶ）

計画

学習を進める

学習計画に沿って学習を進める
他の児童生徒の学習計画を閲覧し、友達同士で学習することも可能

学習

一人で学習

グループで学習

学習の振り返りをする

毎時の学習の達成度・学習の理解度・振り返りを記入する
他の児童生徒の振り返りを閲覧し参考にすることも可能

教員の個別指導

© NTT Communications Corporation All Rights Reserved.